# 令和7年度　生活･総合部会研究計画

## １　研　究　主　題

自ら学びを創り出す子供の育成
－「これ、やってみたい！」をつなぎ「できた！」「よかった！」を実感するために－

## ２　研究主題について

### （１）　主題設定の理由

VUCA の時代とも言われる現代を生きる子供たちに、学校はどのような力を育んでいくことが必要なのか。また、学校はどのような場であるべきか。今、改めて考える時がきている。令和５年６月に閣議決定された教育振興基本計画では、「持続可能な社会の創り手の育成」と「ウェルビーイングの向上」がコンセプトとして掲げられた。学校は、これまでの産業基盤社会で必要とされていた与えられた問題を合理的に早く解決するための資質・能力を育成する視点から脱却しなければならない。予測困難な未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことのできる資質・能力が必要となるのである。そのような資質・能力を身に付けるためには、実社会や実生活から学び、感じ取り、自ら考え、他者と協働して何かを得ようとする探究的な学びが必要不可欠である。その探究的な学びの中で得る知識や技能、考える力や協働する力が、未来につながる生きる力となる。また、このような探究的な学びをどう構想するかによって、子供たちが学校で学ぶ価値を見出せるのではないだろうか。

徳島県小学校教育研究会生活・総合部会のこれまでの研究では、価値ある学習材や地域素材を大切にした指導計画の作成や探究的な学習が発展し続ける単元づくりをすることで､子供の興味・関心を高め､主体的な学習活動の展開につながることが検証された。さらに、内容の充実を求めるだけでなく、目指したい子供の資質・能力を明確にし、そのためにはどのような見取りや支援を講じるのが適切かを考えたり、体験のみで終わらないよう子供自身が自己の成長に気付くことができるような単元づくりをしたりすることが必要である。

そこで、令和６年度より「自ら学びを創り出す子供の育成」副主題「『これ、やってみたい！』をつなぎ『できた！』『よかった！』を実感するために」とし研究を進めている。取組の１年目では、「これ､やってみたい！」をつなぎ「できた！」「よかった！」を実感する子供の姿を意識した実践がなされた。今年度も引き続き、本研究主題の解明に向け、カリキュラム・マネジメント、学習活動、指導と評価に着目し、研究を進めていく。

### （２）　「自ら学びを創り出す子供」とは

自ら学びを創り出す子供とは、実社会や実生活から生まれた切実性のある課題（思いや願い）に対し、身近な「ひと・もの・こと」に自ら働きかけ、他者と協働しながら、よりよく課題を解決し、自分自身の成長に気付いたり、自己の生き方を考えたりすることで、主体的に新たな学びに向かう子供のことである。

### （３）　「『これ､やってみたい！』をつなぎ『できた！』『よかった！』を実感する」とは

自ら学びを創り出す子供の育成にあたっては、子供自身が学習過程において「これ、やってみたい！」をつなぎ「できた！」「よかった！」を実感することが重要であると考える。

子供は、興味・関心が高く、自分にとって切実な思いや願いが生まれ、自分事として本気で取り組みたくなる課題に出会う時、「これ、やってみたい！」と思う。そして、「できた！」「よかった！」という充実感や達成感、学習の有用感を味わうことにより、子供自身が学びを創り出していく。さらに、体験と言語をつなぐことにより、自己を振り返り、自分自身の変容や成長を実感することができ、新たな「これ、やってみたい！」につながっていく。

## ３　研　究　内　容

### （１）　「これ、やってみたい！」を「できた！」「よかった！」につなぐカリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントには、「カリキュラム・デザイン」「PDCA サイクル」「内外リソースの活用」の３つの側面がある。この３つの側面を意識し具現していくことで、子供は自ら学びを創り出していくようになる。

**①　意図的・計画的・組織的なカリキュラム・デザイン**

学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、目標の達成に必要な教育内容を、生活科・総合的な学習の時間を中核とし、組織的に配列する。また、幼児期の教育や中学校教育との接続、生活科と総合的な学習の時間の系統性を考慮し、学びの連続性を保障する。

**②　PDCA サイクルによる指導計画の改善**

子供の興味・関心や発達段階、学校の実態、地域の特性等を踏まえ、年間指導計画・単元計画を作成・実施・評価して改善する。また、実際の子供の姿に応じて柔軟に計画を改善していく。

**③　地域の特性を生かすための内外リソースの活用**

教育内容と教育活動に必要な「ひと・もの・こと」などの資源を教材化し、活用する。また、教育資源のリスト（マップ、人材・施設バンクなど）にまとめ、校内で共有し、日常的に活用できるよう整備する。

### （２）　「これ、やってみたい！」を「できた！」「よかった！」につなぐ学習活動

**【生活科：気付きの質を高める学習活動】**

生活科における気付きは、対象に対する一人一人の認識であり、子供の主体的な活動によって生まれるものである。無自覚だった気付きが自覚されたり、一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられたり、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすることを、気付きの質が高まったといい、生活科は、特に自分自身についての気付きを大切にしている。

本部会では、以下に示す気付きの質を高める学習活動を実現することにより、「できた！」「よかった！」という満足感や達成感を味わうことができると考えている。その手応えが今度は「これ、やってみたい！」というさらなる思いや願いを生み、子供は自ら学びを創り出していく。気付きの質を高める学習活動を展開するには、子供の思いや願いを生かし体験活動を充実させ、表現活動を工夫し、体験活動と表現活動とが豊かに行きつ戻りつする相互作用が欠かせない。

**①　子供の思いや願いを生かす学習活動**

生活科では、まず、子供一人一人の思いや願いを生かす学習活動を展開し、意欲や主体性を高めることが大切である。そのため、子供の興味・関心を踏まえ、学習対象との適切な出会いの場を工夫するとともに、じっくりと関わることができるように時間的な余裕をもつことを大切にしたい。また、思いや願いがさらに膨らむような学習活動を展開することにより、身近な生活に関わる見方・考え方を生かしながら、さらなる活動に広げたり、深めたりできるようにすることも必要である。

**②　価値ある体験活動**

生活科では、対象に直接関わる具体的な活動や体験が欠かせない。その活動や体験を価値あるものにするためには、子供の実態に応じているか、地域の特性を生かしているか、繰り返し対象と関わったり試行錯誤して挑戦したりすることができるか等の視点をもって、体験活動を工夫することが必要である。

**③　伝え合い学び合う表現活動**

伝え合い学び合う表現活動は、子供一人一人の気付きの質を高めていく上で重要である。そこで、子供の学びの多様性を生かしながら、振り返り表現する機会を設けたり、伝え合い交流する場を工夫したりする。その際、教師が子供の発言をひろい、つなげたり広げたりするような支援も必要となる。また、発達段階を考慮し、多様な表現方法を工夫することも大切である。

【総合的な学習の時間：探究的な学習活動】

子供が、「これ、やってみたい！」をつなぎ「できた！」「よかった！」を実感するためには、探究的な学習活動が必要であると考える。探究的な学習活動とは、子どもが切実な課題意識をもち、課題の解決に必要な情報を収集し、集めた情報の整理・分析を行い、考えを明らかにしたり、新たな課題を生み出したりすることである。これらの学習活動を繰り返し、探究のプロセスを連続発展させることが重要である。

この探究のプロセスを支えるのが探究的な見方・考え方である。探究的な見方・考え方とは、各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰してとらえ、実社会、実生活の課題を探究し、問い続けるというものである。探究的な見方・考え方を働かせながら、多様な他者と協働し、横断的・総合的な学習に取り組むことにより、探究的な学習活動はより深まるだろう。

以下に示す、学習活動を実現することが、「自ら学びを創り出す子供」を育むことにつながる。

① 探究のプロセスを充実させる学習活動

探究的な学習活動では、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の一連のプロセスを繰り返し行う必要がある。これまでの取組では、「情報の収集」や「まとめ・表現」については多様な学習活動が展開され、探究的な学習を充実させることにつながった。一方、探究的な学習活動をより深めるためには、どのように課題と出会わせ、自分事とするのか（「課題の設定」）、収集した情報を子供自身がどのように吟味し、より深い学びへとつなげるのか（「整理・分析」）といった点において、より一層充実させることが求められる。よって本研究では、特に「課題の設定」と「整理・分析」の２つを大切にしたいと考える。

ア 課題の設定

探究のプロセスを充実させるには、子供が自ら課題意識をもち、その意識が連続発展することが欠かせない。そのために「ひと・もの・こと」に直接関わる体験活動や、学習対象との出会わせ方、関わり方などを教師が意図的に設定し、自らの課題をもつことができるようにする。また、子供の興味・関心や発達段階を踏まえ、これまでの考えとの「ずれ」や「隔たり」、対象への「憧れ」や「可能性」を感じさせることができるように工夫する。

イ 整理・分析

探究のプロセスを充実させるには、子供が「比較する」「分類する」「関連付ける」などの思考を繰り返し、整理・分析を行うことが欠かせない。そこで、子供が活発に思考することができるよう、思考を可視化することを意識し、どのような方法で情報の整理や分析を行うかを決定することが重要である。また、収集した情報を子供自身が吟味し、その情報を知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら課題の解決に取り組むことも大切にしたい。

② 多様な他者と関わる協働的な学習活動

協働的な学習活動を行うことで、多様な情報に触れ、その情報を異なる視点から検討することができる。また、多様な他者と交流することで相手意識や仲間意識を生み出すこともできる。このような活動を経ることで、一人一人の考えのよい点や可能性に気付き、自分の考えを深め、視野を広げて課題の解決に向かうことができるようになる。

（３） 「これ、やってみたい！」を「できた！」「よかった！」につなぐ指導と評価

学びを通して、「これ、やってみたい！」から「できた！」「よかった！」と変容・成長していく子供の姿を見取り、価値付け、新たな学びへと導くためには、指導と評価の充実を図ることが重要である。

指導と評価においては、子供が自分自身の変容や成長に気付くことができるよう、一人一人の学びに着目するとともに、教師の指導改善と子供の学習改善の両視点から、指導と評価の一体化を図っていくこと

が求められる。

そこで、以下に示す視点に取り組み、指導と評価の充実を目指すことにより、自ら学びを創り出す子供の姿が実現すると考える。

**① 育てたい資質・能力を明確にした単元目標の設定**

子供、学校、地域の実態、生活科・総合的な学習の時間の目標から、育てたい資質・能力を明確にし、単元目標を設定する。

**② 具体的な姿による評価規準の設定**

単元及び授業において評価の観点を適切に定め、目指すべき子供の姿を具体的な姿で想定し、評価規準を設定する。

**③ 適切な評価計画の作成**

指導計画に応じて、誰が、いつ、どこで、どのように評価をするのか、特定の観点に評価が偏らないよう評価規準をバランスよく位置付ける。また、一人一人の子供の学習状況及び成長の様子や変化を公平に見取ることができるよう、評価の場面や方法を工夫する。

**④ 教師の指導改善**

評価計画に沿って行った評価の結果から、指導方法を適宜見直し、改善していく。

**⑤ 子供の学習改善**

評価の結果を子供自身が把握することを通して、学習の意義や価値に気付くことができるよう、評価を伝える方法を工夫する。また、観点別評価規準には示しきれない子供一人一人のよい点や可能性、進歩の状況についても伝え、評価の結果が子供の学習改善につながるようにする。

## ４　研究の進め方

### （１）　研究大会において

本年度は、研究主題及び副主題の解明に向け、郡市研修会を経て、海陽町立海南小学校において研究成果を発表する。

### （２）　各郡市部会において

① 研究主題及び副主題の解明に向け、授業研究会及び研修会を行う。

② 各種研究会や研修会に自主的に参加するとともに、各郡市で取り組んだ研究内容の共有化を図る。

### （３）　各校において

研究内容の（１）（２）（３）に取り組み、実践を充実させる。

## 参考文献

小学校学習指導要領解説　生活科編　平成２９年７月
小学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編　平成２９年７月
「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　生活　令和２年６月
「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　総合的な学習の時間　令和２年６月
今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開　令和３年３月
教育振興基本計画　令和５年６月